

「心情倫理」と「責任倫理」

2022年7月

理事長・チャプレン 井上 良作

あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。
しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。
あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、
正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。

(マタイによる福音書 5章43~44節)

令和4年7月10日は、全国で参議院議員通常選挙の投開票が行われます。私は今回生まれて初めて、自分が住んでいる地区の選挙立会人をする事になりました。日曜日ですので、午前中に教会の礼拝に出席し、午後1時から投票終了の午後8時まで役を務めます。私が知る選挙立会人という人は、投票箱の前に座って票が投函されるのを監視しています。日本では戸籍制度に支えられた住民票による選挙権者名簿の管理が他国に比べて格段にしっかりとしていますので、不正な投票の余地が殆ど無いと思われ信頼ができます。開票作業にも立会人が必要なのではないかとも思われますが、それに関しては市役所の職員の方々が未明までかかって正確なお仕事をしてくださいます。この選挙システムが信頼できるということがどれだけ恵まれたことであるかを、世界における民主主義の無い国々の様子を見ると実感します。

近頃の若者たちの間で「親ガチャ」という言葉があることを知りました。格差社会における持たざる者の階層に自らの意志とは関係なく生まれ落ちたことの嘆きが表現されているようです。そうした辛い現実には確かに切実なものでありますが、選挙を信用できるという当たり前の一点だけをとっても、私たちは世界から見れば「国ガチャ」における恵まれた者と言えるでしょう。公正でない選挙による民主主義の瓦解は人命に関わる事態を引き起こすと考えられるからです。もちろん、こうした恵まれた状態は、国民の自覚と不断の努力によってのみ維持されます。

かつて、人文・社会科学系の大学生であれば必ずと言ってよいほど読んだ書物に、マックス・ウェーバーの『職業としての政治』があります。政治家には、イエス・キリストの山上の説教において語られたような高い倫理観を示す「心情倫理」と、動機の正邪を問わずあくまでも国民に幸いをもたらず結果がすべてという「責任倫理」との二つがあるが、後者が優先されると教えます。「心情倫理」があっても結果として国民を不幸に至らせれば、それは政治家として失格なのだ。しかし、ウェーバー先生に教えられることは、この2つの倫理の緊張関係を内に秘めつつ現実の課題に向き合い結果を導き出す者こそが真に政治に携わる者であるべきだということです。実際には、そのどちらも有していないような政治家も少なくないと思われる昨今です。

さて、選挙権を有している18歳になった清教生は今回の選挙でどのような選択をするでしょうか。未だ18歳になっていない生徒のみなさんも自分の暮らす国と世界の将来を我が事として注視していることでしょうか。私は、清教生の中からイエス・キリストの心である「心情倫理」と人々の幸せに貢献する「責任倫理」を併せ持つ議員が輩出され活躍する人が多く生まれることを夢見ています。